

寸心先生日記抄 (三)

○明治三十四年

頃で

一月一日 早起雪門老師と達摩大師に拜をなす。昨夜

不眠、精神不快なるにより麻水の上に散歩し、歸路

に堀君を訪ふ。午後睡眠。夜坐禪

一月二日 午前坐禪。午後桑原政明君來り雜談。夜坐

禪

此日は大に無用に時を消す

一月三日 午前坐禪。午後山を散歩す。夜坐禪。十二

時頃まで獨參

一月四日 午前坐禪。午後少し眠りて後坐禪。夜坐禪

十一時半まで

鐵舟の詩

獨露巍々宇宙間 盡扶桑國別無山

有時風捲浮雲去 托出天邊雪一團

一月五日 午前坐禪。午後坐禪。夜坐禪。十二時半ま

僧堂にあり未透の者が受くる恥辱を思ふて大に感ん

ず
一月六日 午前坐禪。午後坐禪。今村次七に逢ふ。夜

坐十一時頃まで。榎戸來宿

此夜和尚の處へ招かれ話をきく。參禪の要は實地の
辛苦にあり、人往々禪を以て他に資せんと欲す、大
なる誤なり。參禪の眼目は生死解脱にあり、この外
他事あるなし。余も自省みて大に感ずる所あり

一月七日 昨夜眠られず大に不快なり。早朝洗心庵を
辭して歸宅、年賀狀を書す。心身大に疲勞せるを覺

ゆ

夕に De. Haviland を訪ふ

一月八日 午前湯に入る。午後年賀廻をなす。夜はホ

ーソルンを少しく譯し早く寝につく。

逢坂來り洗心庵に入ると云ふ

一月九日 學校にゆく。午後笠井、野口、武部來る、佛敎青年會につきて。

夜心理學をよむ

山村死去の報來る。棚木三郎の手紙米原より來る。

一月十日 午前出校、上田君來る。午後上田君を停車場前小松屋に訪ひ談話二時間餘。それより直に草鹿君の宅に至り高見を呼びて佛敎青年會の事を話す。夜歸宅、少しく病氣にて臥靡。柴宏氏來る。それより起きて讀書す

久しく靜坐せず、心中何となく不穩

一月十一日 午前出校。午後讀書。夜讀書

讀書の際種々の欲にひかされ心騒し

一月十二日 午前出校。午後讀書。夜讀書

一月十三日 午前四時起きて靜坐す。朝食後好天氣につらされ少しく散歩す。午前十時頃月原心理質問に來る。午後田部君を訪ひ、藤井君と三人に才川の上を散歩し、小立野を廻りて歸る。夜讀書
午前は可なりしも午後は精神快晴ならず

一月十四日 午前六時起きて暫く靜坐す。出校。午後

讀書。運動。夜讀書、十時まで
一月十五日 午前出校。午後讀書及散步。夜讀書、靜坐

讀書の際には頻りに急ぐ心起り、又名譽心など伴ひて心穩ならず、大に猛省すべし。これ功を求むるいやしき心あるによる。何んぞ區々一西田を忘却して一々に酒々落々たらざる

一月十六日 午前六時起きて少しく坐す、心地稍清し。出校。午後讀書散步。學問の事あまり心を亂さず。夜讀書。十時寝につき眠る能はず。種々の妄念心を搦して起る

一月十七日 午前出校。午後會議。かかる時にはとかく陋劣の心を生じ易し
學校にて堀君より「箇中の消息」と云ふ書をかりて讀む

夜草稿を作る。靜坐、十一時半まで

一月十八日 早起靜坐一時間。出校
Bradleyをよむ。やはり急ぎ讀む風あり、心に欲多ければなり
靜坐、十一時半まで

植村定造氏僧になりたりと云ふ。猛烈の志感服すべし。余の如きは日々眠坐禪をなす。奮勵せざるべからず

一月十九日 午前出校。午後三部二年生の級會に臨む。

夜永順寺に行き種々話の中遅くなり遂に一宿す

一月二十日 午前ぶらつどれーを讀む。午後頻に惡寒を感じ臥瘳。持川氏來訪。戸田君來訪。京都大學に轉ずと云ふ

と云ふ

夜に入り發熱甚し、四十度以上なり(し)ならん

一月二十一日—二十六日 「略、概ね「病氣臥瘳」とある

のみ」

一月二十七日 病氣臥瘳。文藝くらぶなどよむ

一月二十八日 病氣臥瘳。氣分大分よきにより論理書

をよむ

母妻やよひ皆風にて氣分あししと云ふ

一月二十九日 此日より瘳を出づ。三部二年總代として

上野忠、上野道來訪

一月三十日 中俣、ヘビラント、イエンケル、藤井等

諸氏來訪。ロジックをよむ

一月三十一日 本日始めて出校。午後讀書。心せくこ

と限なし。夕に逢坂來訪

二月一日 出校。午後沐浴

夜ロツチエ氏の論理などよむ。心せくことかぎりなし。あゝ我何たる愚者ぞ、かくては反りて早く解するを得ず。其上精神を疲勞せしめ智力の發達を害せん

ん

夜別にこれと思ふ事もなければども何やら三時頃までも眠るを得ず

わが心の汚れて片時も定らざる様、數年の工夫も寸功なく誠に愧づべく嘆すべし

二月二日 出校。午後外出せずロジックをよむ。

此夜談話會ありしも出席せず

哲學専門の人新に來りて余の受持の減ぜらるゝ事心にかゝりて快からず。されどもこれも公事をばあまりに我物顔になすと自分が勉強したしとの私心に出づるならん

二月三日 昨夜より今日につゞき雪ふり寒甚し

昨日の事心にかゝりて北條先生を訪ふ。不在にて話すを得ず。靜坐して考ふれば我心のいかにしてかくばかり私欲多きやと深く自ら愧ぢ、かくの如き事はどうでもよしと思へり。されども強いて先方の好通

りにするも不公平なるべし。半分して受持たばわれもかれも可ならん。あすこの事先生に話さん

二月四日 出校。子供病氣未だよろしからず。ことみ午後より産氣を催ふし、夜十二時過男子無事出産。

外彦と名く

二月五日 出校。北條先生に來年の受持につき考を話す。午後申侯氏を訪ひ又この事を話す

人手不足大に困却

二月六日 出校。二年生行軍にて授業僅に一時間。午後ボサンケーをよむ。夜ロジックの草稿を作る
本日より何となく數日の不快を忘れ心穩なり

大丈夫何事も自己の力により他に求むべからず。哲學も功名などの卑心を離れ自己安心を本とし、靜に研究し、自己の思想を統一し、自家の安心と一致せしむべし

二月七日 午前出校。午後何事もなさず。夜論理の草稿を作る。論理もブラッドレーなどの如くとけば面白し。併し學問の末に走りて安心の本を忘る勿れ。福澤先生逝き、先生が獨立獨行、人によらずして事をなせしを思ひ深く感ずる所あり。大丈夫將にかく

の如くならざるべからざる也

二月八日 午前出校。午後四時半より維新館にて戸田

君の送別會あり、無邪氣の遊などして夜十時過歸宅

二月九日 [略]

二月十日 午前七時半頃戸田君を送りて停車場に至る。

同氏京都大學に赴任するなり。兩劇し

歸途雲門老師を訪ふて種々の話をきく。内觀之法を授けらる。爾來之を試みるとす

二月十一日 午前八時頃學校に拜賀式あり。午後は柔

道の大會にて後に書生と共に無聲堂にて夕飯を喫し、

八時頃歸宅

二月十二日 出校。午後在宅、論理學をよむ

二月十三日 出校。午後三部三年生と共に御親書を拜

す。申侯氏の妻君見舞に來る

二月十四日 出校。午後入湯讀書等

大拙居士より手紙來る。衆生誓願度を以て安心となすとの語、胸裡の高潔大可羨。余の如きは日々に私欲の爲め此の心身を勞す。慚愧々々。余は道と思ふの志薄くして、少故の爲め又は些々の肉慾の爲め道を忘ること日々幾回なるを知らず。特に今日は大に誤れり。今後猛省奮發すべし。これも一に

余が克巳の意力に乏しきによる

二月十五日 午前出校

二月十六日 午前出校。午後在宅、ニータチエをよむ。

夜洗心庵にゆき坐禪、逢坂來る

二月十七日 午前在宅。午後洗心庵にゆき提唱をきく。

歸途桑原氏を訪ひ又歸途三竹君を訪ふ。夜十一時頃

歸宅

二月十八日 [略]

二月十九日 午前出校。午後好天氣により市内を散歩

し、持川、堀内二氏を訪ふ。皆不在。歸宅。奥田寛

太郎來る。夜在宅

北條先生の話により山本君へ戸田君を紹介す

余は日々宗教心の微弱なるを愧ぢざるなし

二月二十一日、二十二日 [略]

二月二十三日 午前出校。午後直に誠會に趣き、夜つ

ゞきて永順寺の會を催す。杉森、石川二君來る

二月二十四日 此日より接心始まり洗心庵に止宿す

二月二十五日 午前出校。此日憑次郎方渡邊借金の爲

執達吏の封印をうく

三月二日 此日にて接心了る。瞞まで眠らず

三月三日 午前歸宅。直に牧野、石川を訪ひて憑次郎

方の件につき依頼す。午後三部會にゆく。夜牧野氏
來訪

三月四日 午前出校。午後生徒風紀上の件につき校長

の演説あり。入湯

三月五日 午前出校。夜石川君の宅に中杉氏と會す。

此夜余は大に欲の爲に獨立を失ふ

三月六日 午前出校。夜に入り吉岡氏が不親切なるを

悟り、九時過石川君を訪ふて中杉氏へ依頼す

石川氏打發の事をきく大に猛省し深更まで眠らず

三月七日 午前出校。午後校友會の會議あり。夜牧野

高橋氏來る。牧野氏淺井を訪ふて延期の事を決す。

期日迫り大に心配す

三月八日 午前出校。天氣快晴。午後立野を散歩す。

夜高橋氏歸宅。同氏より二百圓をかる

三月九日 午前出校。午後在宅、持川來る

夜洗心庵にて夜坐の規則を定む。雪門老師蕎麥を馳

走せらる

三月十日 午前憑次郎と石川君を訪ふ。午後石川君中

杉氏と共に來る。憑次郎中杉と淺井を訪ふ。余石

川君と金谷館に趣き雪門老師の提唱をきく。それ

より雪門老師と共に桑原氏の宅にゆき、夜九時頃

歸宅

三月十一日 早朝石川君を訪はんと欲す。反〔つ〕て

石川君來訪せらる。乃〔ち〕二百圓を渡す。

午前出校例の如し。午後石川君來訪、憑次郎の一件

落着

三月十二日 午前出校。午後晝寝。夜論理を草す。

西田勇よりお富様死去の報來る

三月十三日 午前出校。午後石川君來る。夜狩野氏を

大浦屋に訪ふ

三月十四日 午前出校。午後湯に入り髪を切る、心

地よし

憑次郎子供生る

三月十五日 午前出校。午後在宅、何事もなさず。

余實に無爲に時日を徒費するの弊あり、不活潑の致

す所なり

三食の外閑食すべからず

藤本より憑次郎の子を持ち來る、暫く預ける事とな

す

三月十六日 午前出校。午後高橋氏と憑次郎に逢ひ、

それより洗心庵にゆく

三月十七日 午前高見來る。午後二時より佛教青年會

に趣く。余輩等の希望の通り佛教青年會は萬端波佐
場に引受ける事となる

それより直に洗心庵にゆき戒をうけ、寸心居士の號
を雪門老師より賜はる

三月十八日 午前出校、午後晝寝。石川君來訪、共に

憑次郎宅にゆき刀劍を見る。三竹君來り憑次郎と四
人にて酒をのみ飯を食ふ

三月十九日 〔略〕

三月二十日 午前出校。午後何事もなさず。櫻戸に有

效メタルの事を話す。有馬に有效メタルを渡す

三月二十一日、二十二日 〔略〕

三月二十三日 午前洗心庵にゆかんとし思はず晝寝。

ユンケル氏の妻君來る

午後洗心庵にゆき夜十時過歸宅

老師明日東京に出立すと云ふ

寸陰寸璧むだをするな

此の肉身を放棄せよ

三月二十四日 午前中目君を訪ふて山田の事を話す。

午後睡眠。夜西郷の傳をよむ

此日大過なし

三月二十五日 午前出校。問題をする。學科長會議あり。俵給を受取る。所得税など出す。午後悪次郎來り子供の寫眞をとりなどす。天氣よく心地よし。菓子を食べ過す

薄暗きランプの下に一家膳を並べて食す。何となく床かし。人間の至樂は高屋にあらず風景にあらず、唯無事平常の中にある。

月美に天清し。夜練兵場を散歩す

三月二十六日 本日より第二學期試験始まる。今日は

三部三年にチューヘンを試験す。午後點數をつける。

天氣よきにより散歩す

三月二十七日 今日三部二年の試験なり。午後は點

數をつける。夕に田部君を訪ふ、不在。月色絶佳なり

Charlotte Cordot 女史の傳をよむ。決意したる人のうかにも尙きもの也

爾一事を知らず一事を解せざるを恥として、一邪念を去る能はざるを恥とせざるか

三月二十九日 此日にて余の試験を終る。

午後は試験をつける

ミス・サタンより Stalker, Life of Jesus 及び Read Cordt を送り来る。ストーカー氏の基督傳面白し

三月三十日 この日は浦井君の助をなせり。戸田君來る。午後は石川君を訪ひ、洗心庵にゆき、歸路に堀君を訪ふ

夜は北條先生の宅へ三竹君と共にゆきて學校の事など談す

三月三十一日 午前戸田君來り、學問に熱心なる人な

る故方に話もあひ面白し

午後は永順寺にゆき夜遅く歸宅

四月一日 午前桑原氏の子息來る、それより洗心庵に入る

四月二日 此日午後洗心庵に桑原氏送別の會をなす

四月五日 此夜は自分が一生の恥を自白し、身を投じて參せり

四月六日 此日夜十二時頃歸宅

四月七日 此日は點附をなす。午後はハビラント及び

サタン嬢を訪ひ宗教の話をなす

サタンより Young, The Christ of History; Dawson, Nature and Bible なる。

暮にハビラント、湯月、村上和と天徳院に散歩す

四月八日 此日より學校始まる。森内君來りて時間割の變更あり

早朝は坐す。午後及夜は別に何事もなさず。奥田へ手紙を出す

四月九日 此日學校終りて後森内君の新任式、武藤先

生の送別式及び北條校長が醫學部獨立につきての演説あり。それより堀君と共に武藤氏を訪ひ又共に宣

教師フルトンを訪ふ。フルトンは余が古き知人なり

四月十日—十三日 [略]

四月十四日 午前讀書(ウント倫理學)。午後散步、田

部君を訪ふ。夜在宅

四月十五日—十七日 [略]

四月十八日 此日は學校の紀念日にして八時出校、式

終りて生徒運動會を催す。劍道、柔道、弓術、相撲

ベースボールあり。

運動家連中學校の授業をかきて第三ハマッチにゆか

んとす。校長よりの依囑にて之に奔走す。夜石川、

蒲原兩君と有馬、榎戸、大橋、林、小林、稻垣をよ

びて説諭す。ポートの休中にゆくことにして話をま

とむ

四月十九日 午前出校。午後は休なり。午前校長の宅

を訪ふて昨日の結果を報す、(余は昨日の好結果を思ふて喜ぶ念あり、誠に野卑の心根慚愧々々)

午後森内、中目兩君來る。桑原氏の妻君來る。

夜逢坂、山崎二人來り宗教上の話をなす、裨益する

所多し

散策

四月二十日 午前出校。此日校長東京に出立す。此日

は語學部の大會あり、されども余はゆかず

夜洗心庵にゆく、參禪せず

四月二十一日 此日午前七時を期して學校門前に集合

し、同志十數名と倉ヶ嶽にのぼる。同行者、中目、

森内、湯月、田部、永順寺の生徒、外數名

山上にのぼれば麥や草にて色どれる平原の中を白く

手取川の *level* を見る。頗る好景なり。歸路大池を

見る。大岩の下に深水を湛ふ

夜水溜町にゆく

四月二十二日 午前出校。午後在宅讀書

四月二十三日 此日午前七時學校運動場に會して高松

地方に向つて行軍の爲出發す。津幡まで汽車に乗り

それ(より)歩行す

余獨り先じて林により、其近火の狀を問ひ金三圓を

送る。それより高橋をも訪問す。家主不在なり

天氣極めて晴朗、閑に故村をすぐ。坐〔ろ〕に今昔の感に堪へず。夜は高松の仁科と云ふ家に宿す。同宿者は市村及〔び〕同君の助手及び西英盛君なり

四月二十四日 午前七時出發。高松の海濱にて演習をなし、網をひき、それより横山に出て晝飯を喫し、津幡より汽車に乗じて歸る

A Dead Man's Diary をよむ

四月二十五日 午前入湯。午後サタンを訪ひ、かりし書物を返へし、ストーカル氏のポール傳をかりて歸る。ポールの傳をよむに其猛烈の氣象誠に感歎すべし、耶教の今日あるは實にかの如き人物ありしが爲なり

Chapman なる宣教師訪問に来る

閑思閑食を省くべし

四月二十六日 午前出校

此の數日は精神怠惰となり何事もなさず、大に鞭策を加ふべし

四月二十七日 午前出校。午後石川縣教育會の求によ

り津幡に派出し講演をなす。龜田、加納、廣瀬等の知人に逢ふ。夜歸りてホーソルンを讀む

四月二十八日 午前何事もなさず。午後デ・ハヴィルランドを訪ふ

四月二十九日 午前出校。午後チャプマン、ウエルポールを訪ひ、それより森内君を訪ふ。余は此日實に精神墮落の極に陥りし者なり。夕に榎戸來り京都の事凡て余の意と違ふ。余直接に三竹を訪ふ、相談す。夜十一時頃歸宅

四月三十日 午前出校。高見を呼びて話す。余は生徒と學校の爲すに任せ、當分其結果を見ることに決心す

由比君より結婚の報來る

午後三竹君來りボート延期ノ事ニナルナラント話ス

五月一日 午前出校。午後ミス・サタン來訪。夜高橋氏來宿

跪坐、夜坐

戒むべき者、閑思、閑讀、閑食
〔網外に〕 If not now, when ?

朝一時間 夜二時間 靜坐

五月二日 午前出校。午後書ヲ讀ミ文ヲ草ス

五月三日 午前八時學校ニテ皇孫御降誕ノ祝賀式アリ

授業ヲ休ム。午後水口來訪

余石川君ヲ訪ヒ生徒ノ企ニツキ聞ク所アリ。直ニ石川君ト談シ、蒲原君トモ協議シ、午後七時ニ生徒ヲ自宅ニ會シ大ニ詰問ス。併シ相談ハ穩ニ纏リタリ。村松魁來訪ス

五月四日 午前出校。午後北條へ手紙ヲ出ス。夜洗心庵ニユク。

五月五日

午前入湯、水溜町ニユク。午後 *Scraper* Letterヲ讀ム。夜永順寺ニユキ、來學年ヨリ別ニ家

ヲ一軒借ル事ニ定ム。石川へ端書ヲ出ス

五月六日 午前出校。高見より教員寄附金のことにつき要求あり。主幹等の會議の結果與ふるは不可と決

す。午後在宅讀書等

閑食は暫く止めて見たが左程に苦しからず。一週間にても眞に行ひうることは數年も行ひうるものと信ず

余輩何故に苦心して正に従はざるべからざるか。正念は數學の公理の如くに宇宙の大法なり。吾が之を曲げんとしたればとて曲ぐべきにあらず

閑讀閑思を戒むべし

五月七日 午前出校。高見に寄附金募集不可のことを

話す

然れども余の精神はちとまづし

五月八日 午前出校。午後在宅。夜高見、小林來り京都ノ返事ヲ出シ、不得已ノ事情ヲ陳ズ。余モ之ニ同

情ヲ表ス

五月九日 午前出校、午後有馬來り榎戸ノ爲ニ辯ズ。

次ニヴェルポールン、チャプマン來訪。次ニ三竹君來訪、主幹會議ノ結果ヲ聞ク。

夜 De Haviland に招かる。杉森、中目、田部、

中野、長屋、茨木も同じ。種々の遊をなし十一時頃

歸宅

五月十日 午前出校。此日雨天ニテ尋中ノボートデキ

ズ、此事ニツキ種々考フル所アリ

夜ハ南洲傳ヲ讀ム

五月十一日 午前出校。此日天陰レドモ雨降ラズ、尋

中ノ競漕成立ス。夜洗心庵ニ行ク

五月十二日 此日ボートの競漕を行ふにより朝六時に

家を出づ。大野につきしは八時頃なりき。始は雨模様なりしが漸々に天氣よくなりたり。余青組の掛な

りき。夜八時頃歸宅

此頃西本願寺の近傍に火事あり。少しく氣分あしきにより早く寝につく

五月十三日 天氣よし。學校は休なれば朝遅く起く。

午前少しく讀書す。午後は雪門老師を訪ふ。夜三宅少太郎氏來訪

余は禪を始めてより數年、一進一退何の得るなし。

實に滿面の慚惶

五月十四日 午前出校。午後在宅、羅馬書をよむ。桑

原來る。夜ちよつと永順寺にゆき、歸りて又ローマ書一篇をよむ

京都の競技は、ベースボールは四ツにて勝負なし。

劍道もあまりよろしからず。柔道もまけ、小町負傷

五月十八日 [略]

五月十九日 此日天氣晴朗。學校教員十數名と河北瀧

にゆきボートをこぐ。歸路雨に逢ふ

五月二十日 [略]

五月二十一日 午前出校。午後教員會議あり、校長よ

り校長會議の結果を報ず、つゞきて京都市生徒に寄附金を與ふるや否につき議論あり、與へざることに

決す。余大に之を遺憾となす

五月二十二日 午前出校。夜獨逸語教師の會議あり。

席上端なくも余が京都市生徒につき話したるにより、再審議の議起る

五月二十三日 午前出校。午後高見を呼び話す所あり

五月二十四日 午前出校。此日フリドリンドル書店へ

送金す

五月二十五日 午前出校。此日永順寺生徒と寫眞をと

る。夜永順寺にゆく。北條、三竹、杉森、堀、數氏も來る。快談深更に及び、終りに生徒校歌を歌ふ

五月二十六日 午前八時より己亥會の生徒と山にゆく。

午後四時頃歸宅

五月二十七日 午前は例の通り學校にゆく。午後は少

しく眠りて後ウントの論理書をよむ。悪次郎の宅にゆき「たのもし」につききゝたるに、怪しき所ある

により心安からず。得用を訪ふて之を質す。

森内君來訪、不在。

余は此十數日來の精神の怠惰何とも云ひ難し。吁かの如くにして月日をすぐさば、何の日か大志を達するの期あらんや、猛省々々

五月二十八日 午前出校。午後教官會議ありて午後九

時頃に及び漸く生徒に寄附金を與ふることに決す。

それより北條先生の宅を訪ふ、夜二時頃歸宅。この日先生余が將來に關し問ふ所あり、余は先づ學問をなさんと答ふ

五月二十九日 午前出校、午後在宅。夜蒲原君と北條先生の宅に會し、生徒を召集して北條先生より生徒が京都市に關し話す所あり

五月三十日—三十一日 〔略〕

六月一日 午前出校、一部二年生に心理學の試験をした

午後は金谷館にゆき雪門禪師の楞嚴經の提唱をきく。老師云ふ、いかなる事にも一生之を守る人は尊き人なりと。北條先生井伊掃部頭の墓を守りし遠藤氏のことを話す

夜は洗心庵にゆく、參禪

閑食すべからず

無用の談話すべからず

散漫に讀書すべからず

〔禱外に〕 造次顛沛にも此心を失ふべからず

六月二日 午前教科書をよむ。暫くして宮森君來訪。

午後三竹君の宅に於て己亥會の最終會をなす。余人の話をきく毎に大に恥づる所あり

六月三日 午前出校。午後高見所罰の件につき會議あり。余が説は自分ながら何だか分らぬ事を云ひたり。市瀬來り話をきく居りし爲め山崎に逢ふを得ず、遺憾

此日憑次郎方に火事にならんとす

六月四日 午前出校。午後深田藤治君來り久しぶりにて快談せり

六月五日 午前出校。午後三部三年生と共に寫眞をとる。此夜中目、湯月、余と三人にてユンケル、デ・ハピランド二人を金谷館に招きて晩食をなす

六月六日 午前出校。此日憑次郎妻を迎ふ。夜深田君と北條先生を訪ふ

六月七日 午前出校。夜憑次郎島田氏と金城樓に於て客を招きて饗應す。十一時歸宅、會者二十人計

六月八日 午前出校。午後在宅。夜大島義脩君來澤につき舊知己古今亭に會す

六月九日 午前藤井君の宅にて近松の講義をきく。午後風邪の氣味にて臥す。夜一寸とハピランド來る

六月十日 午前出校。午後四時より失木又太郎君獨逸

より歸國せるにより北條市村兩氏と之を金谷館に招く

六月十一日 午前出校。午後一寸とチャプマンを訪ふて書物を返す。法科三年生と共に撮寫。夜山崎來る

六月十二日 午前出校。午後文科三年生と撮寫す

六月十五日 午後堀君の宅にゆき角田君來り話し居りしかば、遂に洗心庵にゆかず

六月十六日 午前藤井君の宅にゆき近松の曾根崎心中を讀了す。晝にチャプマンとウエルボールンとより

招かれて行く

六月二十日 午前出校。午後永順寺にゆく。夜秋月を訪ひ、かれ身を耶蘇教に投せんとするにつき話す所

あり

六月二十一日 此日より洗心庵にゆく

六月二十三日 此日午後歸宅

六月二十四日 此日より學年試験始まる。午前出校浦井君の爲歴史の試験をなす。夜石川君を訪ふ

六月二十五日 午前出校。三部三年の試験をなす。午後中目君來り夜三竹君來る

六月二十六日 午前出校。獨法一年の試験をなす。午後より夜にかけてトルストイの Kreutzer Sonata

をよみ了る

六月二十七日 午後ハピラントを訪ひ、それよりダン

ロップを訪ひ、それより田部君を訪ひ、それより森岡を訪ふ

六月二十八日 午前出校。三部二年の試験をなす。

午後教官會議あり

六月二十九日 午前出校、獨法一年の試験をなす。夜

ミス・サタンの招により七時頃よりミス・サタンの家にゆく。會する者チャプマン、ウエルボール及び

青木と云ふ士官なり

六月三十日 午前有馬、笠井、小川來る。午後中目君

を訪ふ

呼半歳の日月も茫々の中にすぎ去りぬ〔特に大字にて書す〕

七月一日 午前八時に學校に行て論理の試験を爲し後に心理の講義をなす

校長の依頼により外國人教師の件につき上田君へ手紙を出す

午後少しく眠る。鈴木美雄來る。午後三時頃より永順寺にゆく。來學年の計畫につき相談す(候補者上

野、奥田、秋月)

六時頃より香川善治氏を招き鐵舟先生の話をきく。
永順寺生徒と及び來會者は明石、石川、角田、森内、
田部等。十二時過歸宅

余は鐵舟先生の話につき感じたる者は、一日中少しも閑隙のなかりしことなり。一時の勇氣は出しようも、この事は實に難し。併し人間かくの如くならざるべからず

七月二日 午前八時出校、心理學の講義を終る。〔以下略〕

七月三日—五日 〔入學試験と探點のこと〕

七月六日 此日にて入學試験を終る。午後睡眠。五時

頃より高等、専門兩校の談話會に趣く。九時頃歸宅、
讀書。榎戸、丹治、藏田來る

七月七日 〔略〕

七月八日 午前早起、散歩、靜坐、心地よし。讀書。

午後三年生の及落判決會あり。夜高見來る

七月九日 此日は終日人の對手をなせり。午前小川來り石川縣學生會のことを話す。藤田俊、笠原來り、

次に丹治、下田、水口等三部卒業生來る

午後藤井君寒山子(やまのこ)を持ち來り、次に中村、布施、守

屋來る。次に鈴木美、池上、藏田來る。夜柏原來る。

七月十日—十一日 〔略〕

七月十二日 午前八時出校。菊地文部大臣來る。午後

森田君來る。ウエルボールを訪ふ

七月十三日 午前多田來る。ダンロップを訪ふ。午後

石川君來る。藤田來る。夜三宅氏を訪ふ。

Henry Drummond の傳を読む。此日桑原歸宅

七月十四日 午前讀書。午後中目君を訪ふ。Drummond の Natural law in spiritual world を借る

七月十五日 此日午前六時出校。前田侯爵(利爲)來

校。×光線を見る。

根保の事につき第二中學にゆく

七月二十八日 此日午後洗心庵より北條先生を訪ひ、

舍監の件を承諾す

七月二十九日 此日午前歸宅。杉森氏へ手紙を出す

得田氏京都より來る。夜藤岡君來り久しぶりにて快

談をなす

七月三十日 午前一寸學校にゆく。書籍をかる。毛利

可久君來る

七月三十一日 石川、逢坂、三竹三君と美川につき正

壽寺に入る

八月一日

此日より美川正壽寺に於て接心會を開く

八月七日

此日にて接心會を終る。藤岡、藤井、得能を美川の餅米に訪ふ、午後七時五十分の汽車にて歸宅

八月八日

午前學校にゆき書籍をかり來る。午後得能

君來る

八月九日

午前在宅讀書。午後得能君來る、共にユンケルを訪ふ。夜北條先生を訪ふ。渡邊君に逢ふ

八月十日

午前中俣君を訪ふ。森内君へ手紙を出す。三部三年の倫理を同君に依托せんが爲なり。午後堀君と洗心庵にゆき寶藏論を校正す。夜坐禪

ことみ病氣

八月十一日

午前在宅讀書。

午後同右。

夜洗心庵にゆく。宿泊

八月十二日

夜洗心庵にゆく

八月十三日

此日大に雨ふる。午後より洗心庵に入る

八月十四日

老師紀州に立出す

八月十七日

夜十一時頃歸宅

八月十八日

午前石川君を訪ひ寄宿の事を話し、それより長及び毛利可久君を訪ふ。得能、藤岡未だ歸らず

夜宇都宮よりナイチンゲール傳を買ひ來りて讀了。

深く嬢が高潔の志と其才幹とに感んず。個人の名譽などに局促するはつまらぬ事なり。誰か今の世に熱誠の同情を以て働く者ある

藤井久太郎來訪

八月十九日

午前學校にゆき書籍をかる。此日より倫理參考書をよみ始む。夜洗心庵にゆく

八月二十日

午前早起、ウント倫理學をよむ。十時頃病院に行き高安氏につき眼の診察を乞ふ。四度なり。併し今の處心配なしと云ふ。歸途三竹君の處により晝飯を喫す。

午後讀書。夜洗心庵にゆく

八月二十二日

午前讀書。午後得能君來訪、これより

ウエルテルの悲哀をよまんと約す。雨劇しくふる。

併し涼しくなりぬ。藤岡未だ歸らずと云ふ

夜洗心庵にゆく

八月二十三日

午前讀書。午後毛利君來る。夜洗心庵

にゆく

八月二十四日

午前學校にゆく。俵給を受取る。杉森未「だ」歸來せず。兩三日來シデウイック倫理學をよむ。慰にイブセン氏の海の女をよむ

夜洗心庵にゆく。十一時頃歸宅。半月の光わが寢室に樹影をうつしてさしこむ様、いかにも清く靜かにして心地よし

八月二十六日 〔略〕

八月二十七日 午前出校。今井會監より事務の引繼をうく。午後得能來る。共に藤岡を訪ふ、不在。歸宅後藤岡來訪。夕頃より藤井君を訪ふ

八月二十八日 午前出校。磯田、佐野より事務の引繼をなす。午後得能來る。これより出立すといふ。夜石川君を訪ふて香川氏の事を頼む

八月二十九日 午前校長を訪ひ、杉森を訪ふ。午後山本より父病氣歸國の旨を報ず。余下安藤町中村にゆき之を吊す。佐野來る

夜思出の記をよみ終る

九月一日 昨日より下痢にて心地あし。午前一寸と佐野を訪ふ。夜藤岡君を訪ふ。同君が明朝歸京するが爲なり。始めて相川と云ふ彫刻家に逢ふ

九月二日 午前佐野君來る。九時より主幹會議に列す
九月三日 午前出校せず讀書。午後山本君快談、夜十一時頃に至る。山本君宿泊

呂新吾と云ふ人の語録面白しと云ふ

九月四日 午前佐野君來り寄宿舎を見る。山本君歸る。

午前九時頃より教官會議始まる。學生課の事務分掌を申渡す。午後杉森君を訪ひ學生課個人の分掌を相談し、共に金谷館にゆく。蒲原、草鹿、入江氏の送別會あり

九月六日 午前早起靜坐。午前九時出校、種々の件あり。始めて新任の永井と云ふ人に逢ふ。蒲原君出立。午後倫理學を考ふ、よき考出です。夜堀君來る

九月七日 午前九時出校。公認下宿につき教官の相談あり。余は熱心の餘りちと高慢に見えしか、宮川の感情を害せり。然れども余は少しも心に疚しき所なし

午後もひきつゞき會議あり

夜歸宅。家内面白からず、心神不快

田部へ思出の記をかへす

九月八日 午前は別に何事もなさず。笠井生來る。午後湯目君を訪ふ。松崎生來訪。阿部維巖の紹介にて富岡教雲と云ふ者來る

鹽川町河合君の跡へ轉宅と決す

〔中絶〕

十月四日 九月以來何となく心せはしく、茫々の中に

一月を經過せり

世事は Providence に任して吾心の修行を勤むべし。
かゝる馬鹿らしき浮世に何の望ありて局促するや。

未練の事なり

〔中絶〕

十月十六日 祈れく、すべての物をさへげて、名も

利も學問も「毛筆にて大書す」

十月十七日 午前在宅、午後三々塾を訪ふ。田部、森

内二君來宅、不在。夜は考究

〔中絶〕

十一月一日 午前チーレをよむ。九時頃出校。

午後寄宿舎にあり、フライドラルを読み、四時過歸

宅

佐野、寄留舎員少しと不平を云ふ

夜無盡燈の文を草す、後靜坐

〔以下なし〕

(西谷啓流稿)

前 目 次

西田幾多郎博士追悼號

西田幾多郎博士追悼號 西田幾多郎

私の論理について(絶筆) 西田幾多郎

日記抄

西田君の憶ひ出 文學博士 狩野直喜

「善の研究」の生れるまで 文學士 島谷俊三

場所とコラ 文學博士 山内得立